

テーマのねらい

時間規律・労働規律という身近な事象が、日本や世界の歴史と密接に関係しながら形成されてきたことを、資料の読み取りを通じて把握する。また、近代化によって、人々の価値観が変化したことを確認し、近代化が人々に与えた影響について考える。

カッテンディーケ

日本滞在中の経験を「滞日日記抄」として出版（1860）した（平凡社東洋文庫『長崎海軍伝習所の日々』）。日本人について辛口の論評も目立つが「百姓は今その所得の五分の二を、国家または藩主に献じ…日本人のような勤勉な国民がなぜ貧乏をしているのかの理由も、これで判る。」と農民の勤勉さを記録している。帰国後、政界に転じて海軍大臣を務め、在任中に病死した。

オールコック

軍医として勤務した後には外交官に転じた。中国で1844年から領事として福州や上海で勤務し、1859年に駐日総領事、次いで初代駐日公使に任命され、各国外交官の間で中心的な役割を果たした。攘夷浪士に公使館（東禅寺）を襲撃（1861年第一次東禅寺事件）されるなどの経験を持つ。また、1864年の四国艦隊下関砲撃を主導した。記録に残る限り、外国人として初めて富士山に登った（1860）。教科書でも引用した『大君の都』の記述は、政治・経済・社会・文化など多岐にわたる。

活動のタイミング

A 「第1編 近代化への問い」とセットで【近代化という時代を学ぶ導入として】

- ・テーマ①は、教科書p.16「産業革命が生み出した変化は？」の問いと関連が深いテーマである。
- ・近代以前の労働の在り方を読み取り、近代化によって生じた人々の価値観の変化を理解する。
- ・教科書p.84の図2「ある製糸女工の一日」を参照して、日本でも、産業革命によって労働が時間で管理されるようになることを示してもよい。

B 教科書p.38「4節 イギリス産業革命とアメリカ独立戦争」学習前【近代化という時代を学ぶ導入として】

- ・4節では、イギリスで産業革命がおこることを学習する。それに先立って、産業革命をむかえる直前の労働の在り方を確認し、産業革命によって生じる社会の変化に見通しをたてる。

Link テーマ① なぜ「時間を守る」ようになった？

関連するページ → p.39 p.53 p.65

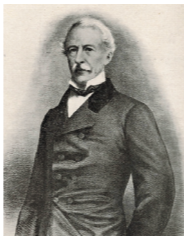
私たちは普段、時間を守ることや時間にもとづいて行動することは大切なことであると考えています。しかし、このことは歴史のみで当たり前のことではありませんでした。では、私たちはいつごろから「時間を守る」ことが大切だと考えるようになったのか、資料を読んで考えてみましょう。

① 近代以前の日本の時間 ～江戸時代の時間認識～

資料 A カッテンディーケがみた日本

「日本人の悠長さといったら呆れるくらいだ。…(船の修理に必要な)材木を注文し、…漸くその船を修理台に引き揚げようとする段になって、材木がまだ届いていないという始末で…」
(カッテンディーケ著、水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』)

カッテンディーケ(1816～66) オランダ海軍軍人・政治家。1857年、江戸幕府が建造を依頼したヤーパン号(威風丸)を日本まで回航し、幕府が設立した長崎海軍伝習所で1859年まで教官をつとめた。



オールコック(1809～97) イギリスの外交官。1859～64年に駐日総領事・初代駐日公使をつとめた。

資料 B オールコックがみた日本

- I 「東洋では、あるいは東洋人にとっては、時間はけっして高価なものではないから…」
- II 「まったく日本人は、一般に生活とか労働をたいへんのんきに考えているらしく、なにか珍しいものを見るためには、たちどころに大群衆が集まってくる。」
- III 「自分の農地を整理と保っていることにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはないであろう。田畑は、念入りに除草されているばかりか…目に見えて整理と手入れされていて、まことに気持ちが良い」
(オールコック著、山口光朝訳『大君の都：幕末日本滞日記』)

ステップ① 資料Aと資料BのI・IIからわかる江戸時代の日本人の時間意識について、当てはまる語句を選んでみよう。

江戸時代の日本人が【 時間や期限を守る ・ 時間や期限に無頓着な 】様子が読みとれる。当時の日本は、現代の一日を等分して時刻を示す定時法ではなく、昼と夜を等分して時刻を示す不定時法が使われ、季節によって1時間の長さが異なった。そのため、江戸時代の日本人の時間認識は【 大まかなもの ・ 正確なもの 】だった。

ステップ①・② 不定時法

江戸時代の日本では、日の出の約30分前(薄明かりが始まった頃)を「明け六つ」、日没の約30分後(薄明かりが終わった頃)を「暮れ六つ」と呼び、ここを基準として1日を昼と夜に分け、それぞれを6等分した時間(約2時間)を「一刻」とする不定時法を行っていた。したがって、同じ「一刻」でも夜と昼とでは、また季節により長さが異なっていた(夏至の頃、昼の一刻は2時間29分、夜の一刻は1時間21分となる)。時刻の数は、子(九つ):0時を中心とする一刻 → 丑(八つ):2時を中心とする一刻 → 寅(七つ) …と十二支と数で示し、巳(四つ):10時を中心とする一刻 → 午(九つ) …のように正午になると数が九つにもどる。明治5年の改暦[明治5年12月2日(=グレゴリオ暦の1872年12月31日)の翌日を明治6年1月1日とした]で定時法に移行した。

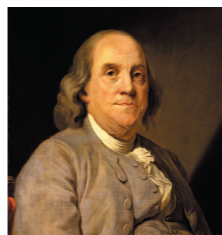
フランクリン

1706年にボストンで生まれ、家業のろうそく製造や兄の印刷業を手伝い、1724～26年にイギリスで印刷工として働いた。帰国後フィラデルフィアで新聞・暦などを出版し成功する。公共事業に貢献するとともに、自然科学の研究に没頭し避雷針を作るなどした。植民地の自治にも参加して印紙法反対運動に携わり、独立宣言起草委員にも選ばれた。独立戦争中はフランスへ派遣され、フランスとの同盟締結や資金援助獲得に成功するなど外交官としても活躍した。その後イギリスとのパリ講和会議では代表を務め、憲法制定会議ではペンシルヴェニア代表として連邦派と反連邦派の妥協に貢献した。1732年に発行した「貧しいリチャードの暦」には分かり易い格言が多く掲載されて好評を博し、以後25年間刊行し続け多くの利益を上げた。また晩年に執筆された「フランクリン自伝」は、独立期のアメリカ人の記録として歴史的価値があるとともに、文学的にも評価が高い。

ステップ② 資料Bから読み取れる日本人の仕事に対する意識について、当てはまる語句を選んでみよう。

資料BのI・IIからは、日本人の時間感覚と労働に対する【 大らかな様子 ・ 厳しい様子 】に驚き、あきれている様子を読みとれる。資料BのIIIは日本の農民の仕事ぶりを【 称賛 ・ 非難 】する記録を残している。時間感覚が現代と異なっていたとしても、日本人の仕事ぶりそのものは勤勉でまじめだったことが資料から推察できる。

② 欧米の労働者の時間や仕事に対する意識 ～18世紀前半の様子～



フランクリン(1706～90) アメリカの実業家・政治家・科学者。印刷業で成功し、稲妻が電気の放電であることを明らかにした。アメリカ独立戦争(→p.39)の際に外交官として、フランスとの同盟締結に成功した。

資料 C 18世紀、フランクリンが10代の終わりにイギリスにわたり、印刷工として働いたときのこと

「私の飲み物は水だけだったが、50人近くもいた他の職工たちは、みんな大のビール党であった。…私の相棒などは、朝食前に1パイント(568ml)、朝食の時にチーズをはさんだパンと一緒に1パイント、朝食と昼食の間に1パイント、昼食に1パイント、午後の6時ごろに1パイント、1日の仕事ですんでからもう1パイント、毎日これだけ飲むのだった。」

「(私は)決して休まないで 一現に私は聖日曜日*をきめこむといったことはなかった—主人の気に入りに、それに植字が並はずれて早いので、急ぎの仕事といういつも私が仰せつかったものだ…」
※労働者などが日曜日に深酒して月曜日に欠勤すること。あるいは、仲間たちと月曜日も飲み続けて欠勤すること。フランスなどの国々でも同じような「習慣」があった。
(フランクリン著、松本慎一ほか訳『フランクリン自伝』)

ステップ③ 資料Cの18世紀前半のイギリスの労働者とフランクリンの仕事ぶりを比較してみよう。

資料Cではビールを飲んで仕事をする労働者が示されており、18世紀前半のイギリスの労働者の規律が【 きびしかった ・ ゆるかった 】ことが読みとれる。しかし、「午後の6時ごろ」や「1日の仕事ですんでから」などの表現から、フランクリンの相棒も【 不定期 ・ 決まった時間 】にビールを飲んでいてわかる。仕事に対する姿勢は別として、時間で労働を管理するようになったことが推測される。また、フランクリン自身は【 時間をかけて丁寧な ・ 早くて正確な 】仕事ぶりが評価されている。その後、欧米社会は大きな変革期をむかえ、この変革期を経験した19世紀の欧米諸国の人々には日本社会が資料A・Bのようにみえていたのである。

トライ! ステップ③ 波線部について、時間にもとづいて行動するようになった背景として考えられる、18世紀後半から19世紀にかけて欧米社会が経験した大きな社会の変化として最も適切なものは何だろうか、次の選択肢から選んでみよう。
①産業革命によって機械化がすすみ、効率的に労働することが求められた。
②フランス革命の際に、ナショナリズムの考え方がひろまり身分制への批判が高まった。
③アメリカで開拓により西部地域への白人移住がすすむという、先住民が放逐された。

トライ! の解説

産業革命によって、機械を活用して効率的に生産することが求められるようになった。このために、労働者は時間を正確に管理しなくてはならなくなった。上記に加えて、新たに発達した鉄道を安全に運航するためにも、時間を守ること、統一された時刻を用いることが重要になった。こうした機械化や労働の管理は、p.97「大量生産・大量消費は生活をどのようにかえた?」で確認するように、大衆化の時代にもつながる問題である。

ステップ③ 時間認識

時間をどのようにとらえるかは、時代や地域によって異なる。オールコックは「東洋人にとっては、時間は決して高価なものではない」と述べており、当時の日本人の時間認識と現在の日本人の時間認識との間に、大きな開きを感じられる。一方、「フランクリン自伝」には、「1分という時間さえ容易に得られぬ以上、1時間もの時間を無駄に使うな」という格言が記されている。現在の我々の感覚は、こちらに近いのではないだろうか。また、フランクリンのような時間認識を身に付ける前提として、正確に時刻を知る必要がある。この課題を技術的に解決したのが、定時法と機械時計の普及であった。